

少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発（Ⅲ） 高齢者の地域知を活用した地域学習と巡回展事業

青柳かつら・山下俊介・黄京性

Key Words 高齢者 (The elderly)、地域学習 (Regional studies)、地域知 (Indigenous knowledge)、博物館 (Museum)、巡回展 (Traveling exhibition)

1 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

近年、北海道では、大幅な人口減と高齢化の進行が予想されており、自治体の存続や、産業・くらしの活力低下が心配されている。問題の解決には、若者の雇用の場創出や住民の地域意識を促すことが欠かせない。他方、これらのベースとなる方策の1つとして、高齢化をネガティブに捉えるばかりではなく、高齢者が持つ地域独自の知識を積極的に活用して、地域の個性や誇りを産み出す地域学習を各地へ拡げることが重要である。さらには、地域博物館がこの拠点として、知識の集積や人材の交流の場となれば、超高齢社会における博物館の役割発揮につながる。

こうした着眼から、青柳は、地域博物館等と連携して、地域資源マップ製作（青柳 2014、2019）、回想法サロン（青柳 2017、2018b）、地域資源を利用する技術再現と映像記録（青柳 2015a）といった高齢者対象の学習プログラム（以下、高齢者プログラム）を実施し、その成果を高齢者プログラム集（青柳 2015b、2018a）として継続刊行してきた。2018年度からは、著者らは、1) 博物館の連携、2) 映像をツールとする世代交流、3) 高齢者のウェルビーイング（幸福感）をキーワードに、高齢者プログラムとして使用できる、地域学習コンテンツなど⁽¹⁾を開発する共同研究を開始した。

一方、広域で見ると、道内博物館では、資金・人員・ノウハウ等の不足から高齢者プログラムを実施する館は少数に留まっている（青柳 2016）。高齢者プログラムの普及には、触れる機会を創出して地域社会のニーズを高めること、企画側の博物館関係者に、実例に基づくノウハウを提供したり、上記の不足に配慮し、身近な地域資源や既存の博物館資源を活用して、簡便に高齢者プロ

グラムを実践できる支援知を明らかにすることが重要である。

こうした問題意識から、本研究では、まず、①市町村立の地域博物館や高齢者を会員とする組織等と連携して地域学習行事を開催し、②①で開発した地域学習コンテンツなどを紹介する巡回展を、開催地の博物館・公民館と共催した。そして、これら一連の事業を推進するための支援知、そして事業効果と課題を明らかにすることを目的とした。

本研究を実施した2018～2021年度の大きな社会事象に新型コロナウイルスの感染拡大がある。本稿では、①②について、この事象への対応策とそこでの困難についても明らかにした。

なお、①は青柳、山下が参画し、②の巡回展事業は、著者3人が参画して共同研究の成果を普及した。本稿は、青柳が分担した地域学習プログラム開発を中心に、著者らが共通して関係した部分を補足して記述した。

(2) 研究の方法

1) 地域学習プログラムの開発と評価

地域学習プログラムを開発・実践するモデル地として、士別市朝日町と名寄市智恵文を設定し、2018年度より地域学習行事を開催した。この2地区の人口は、士別市朝日町は、1,163人、名寄市智恵文は426人（いずれも2020年現在）であり、近年人口減少と高齢化が進行している。なお、高齢化率は、士別市40.3%、名寄市32.4%（智恵文地区のみは38.3%）で、北海道全体の数値31.7%（いずれも2020年現在）を大きく上回っている。

青柳は実施主体の1つとして毎回の地域学習行事に関わり、プログラムの企画と当日の進行役を務め、地域学習の一連の事業経過を参与観察した。また、2地区の行事参加者に2021年度にアンケートを実施して行事の効果を把握した（表1）。

行事評価に関する項目では、地域づくりへの参画意識の指標を、トピリシ勧告の5つの目標⁽²⁾を参考にして設定した。また、同2地区の回答差異は、実施したプログラムの内容や頻度が異なるため統計解析は行わず、最多の回答を比較することで傾向を把握するに留めた。ウェルビーイングに関する項目は、 χ^2 検定と残差分析によって、行事参加者全体（2地区の合計値）を、上川北部地域居住の高齢者を対象とした既存結果（北海道社会福祉協議会 2009）と比較して、行事参加者の回答の特徴を把握した。クロス表において、期待度数が1以下のセルがあった場合、および期待度数5以下のセルが全セルの20%以上あった場合はイエーツの補正を行った。

2) 巡回展の開催と評価

2021年度、道北地区の市町村にて開催する巡回展事業を計画した。この事業では、著者らは企画制作を担い、青柳は、その一人として事業計画策定、展示製作、広報等に関わり、一連の事業経過を参与観察した。

また、同事業では、開催館の事業担当者、そして展示会と併せて行った関連講座参加者へのアンケートによって展示会の事業効果を把握した（表1）。なお、感染症拡大防止と、消毒等の対策業務の負担増に配慮し、展示室据え置き型の観覧者アンケートは自粛し、上記の方法にて評価に関わる情報を収集した。

2 地域学習プログラム開発事業

(1) 事業の場づくり

プログラム開発・実践の場として、朝日町では、2009年より協力関係にある朝日郷土資料室（以下、資料室）、資料室の運営を支援するボランティア組織である、知恵の蔵運営委員会（以下、知恵の蔵）（2018年度運営委員数22人、同年度平均年齢75.0歳）と連携した。すなわち、資料室を会場として、知恵の蔵運営委員（以下、委員）が参加して思い出を語る行事、「知恵の蔵サロン」の場を利用した。参加者は委員を基本とし、学習テーマに応じて事務局（資料室）が関心や専門性を持つ住民を誘うクローズ型とした。

智恵文では、2018年度に新たに関係形成した、智恵文公民館（以下、公民館）、智恵文中央老人クラブ（以下、クラブ）（同年度クラブ員数17人、同平均年齢82.6歳）と連携して、公民館を会場に、クラブと青柳が共催する「地域学習会」を創出した。

クラブ員への行事周知と出欠確認の負担を減らしたい意向を受け、参加形態は、誰でも参加でき、事前申し込み不要のオープン型とした。行事開催の広報は、智恵文地区全世帯に対して行うこととし、公民館の協力により、自治体広報誌に予告ちらしを挟み込んだ。

プログラム開発にあたっては、朝日町では、資料室が所蔵する生活用具などの実物資料、昭和期の産業や暮らしに関連した写真などといった、博物館資料をなるべく活用することとした。

一方、公民館を会場とした智恵文では、高齢者プログラムへの要望の1つでもある「博物館外での出張型レク（出前講座）」（青柳 2020）のニーズを満たす、体験型プログラムや教材の開発に留意した。

(2) プログラム開発の目的と設計の工夫

1) プログラムの目的

地域学習プログラムの目的は、①高齢者の心の健康づくり、②地域の歴史文化の記録・保存（アーカイブ）、③高齢者と若い世代の交流・文化伝承の3点とした。

①では、事業関係者で実施可能な「療法ではない回想法」、「地域回想法」（来島 2007；北名古屋 2013）を意識した。すなわち、高齢者が心の元気、地域づくりに社会参加する意欲や達成感を得ながら、プログラムを楽しみ、閉じこもりや介護を予防することを目指した。

まず、モデル地の地域資源、その利用の歴史・文化を勘案して、学習テーマの候補をつくった。次に、後述の関係組織・機関と相談し、学習テーマを絞り込み、使用する素材の提供・助言を得たり、内容への要望を反映するなどして、プログラムを整備した。

2) プログラム設計上の工夫

朝日町では、プログラムの素材とする博物館資料の候補を、資料室に選定してもらったり、さらには、収蔵陳

表1 アンケート調査質問項目

地域学習参加者	巡回展開催館担当者	巡回展関連講座参加者
1 回答者の属性 性別、年齢、参加開始年	1 展示観覧者の属性 多かった年齢層、利用形態	1 展示観覧者の属性 性別、年齢
2 行事に参加してよかったこと	2 展示の作りやすさ	2 展示の評価
3 行事の振り返り(項目別評価)	3 展示会を開催してよかったこと	展示を見たか、展示の満足度、 展示のよかった点
4 ウェルビーイング 主観的幸福感、主観的健康感	4 運営上の苦労点(自由記載)	
	5 感想(自由記載)	

表2 地域学習プログラムの実践概要

年度 内番 号	朝日町				智恵文				
	開催日	テーマ	参加 人数 (人)	一 般 参 加	開催日	テーマ	参加 人数 (人)	一 般 参 加	備考
2018年度									
1	5/18	①顔合わせ、②活動計画策定	9		7/19	①顔合わせ、②活動計画策定	9	○	
2	7/18	①学習・サロン「馬追いの集材技術」	7	○	8/23	①学習・サロン「綿羊の飼育」、②体験「羊毛ストラップづくり」	8	○	初午会参加
3	10/24	①学習・サロン「暖房用具と冬の暮らし」	11		10/25	①学習・サロン「綿羊と衣服」、②体験「羊毛で毛糸をつくろう」	11	○	北大スタッフ参加
4					11/15	①学習・サロン「馬の生産と飼育」、②活動振り返り	23	○	智恵文小5～6年生・教員参加
2019年度									
1	7/17	①学習・サロン「馬を使った米づくり」、②再現映像視聴	9	○	5/16	①学習・サロン「馬を使った米づくり」、②映像視聴	10	○	初午会・地区住民参加、北大スタッフ参加
2	9/18	①学習・サロン「天塩川の恵みと水害」	9	○	5/16	①交流学习「昔と今の米づくり」	14		地区住民参加
3					7/18	①学習・サロン「開拓期の食」、②体験「石臼できなこ餅づくり」	12	○	智恵文小3～4年生出前授業(社会)
4					9/19	①学習・サロン「昭和初期の食」	13	○	智恵文小教員参加
5					11/7	①学習・サロン「天塩川と智恵文」、②昭和30年天塩川水害映像視聴	15	○	智恵文中教員、市高齢者福祉担当参加
6					11/7	①交流学习「天塩川と智恵文」	15		智恵文小5年生出前授業(理科)
2020年度									
1	6/23	①学習・サロン「馬追いの道具」	5		7/16	①学習・サロン「開拓期の学校教育」、②体験「紙石盤に石筆で字を書こう」	16	○	初午会参加
2	7/14	①学習・サロン「昭和期の学校生活」	8		8/6	①学習・サロン「昭和期の学校生活」	19	○	市議、智恵文小教員参加
3	9/8	①学習・サロン「昭和期の食」	8		9/10	①学習・サロン「食文化」、②活動振り返り	20	○	市議、名寄市街住民、智恵文小教員、市生涯学習担当参加
2021年度									
1	11/8	①学習・サロン「昔の商工業：デンブ製造業、装蹄業」	11		10/7	①学習・サロン「智恵文の市街地・商工業」、②活動振り返り	17	○	市議、名寄市街住民、智恵文中教員参加
計				68	計				202

注1) 網掛け部は、本事業から派生した智恵文小学校児童への出前授業を示す。

注2) 「一般参加」の○は、共催者である知恵の蔵運営委員会(朝日町)、智恵文中央老人クラブ(智恵文)以外の一般参加者があったことを示す。

列型の展示室内で開催できる長所を活かし、例えば思い出サロン(後述)での話題の展開に応じて、関連する実物資料を収蔵場所から移動して参加者に提示するなど、柔軟に資料室所蔵資料を素材として使用した。士別市立博物館からも、プログラムへの助言のほか、素材とする同館所蔵の映像・写真資料等を提供いただいた。

公民館を会場とした智恵文では、知恵の蔵が活動する朝日町と比べ、地区内での地域学習の実績が少ない中での事業開始となったが、名寄市北国博物館から、名寄市内・智恵文地区の地域史の文献資料、さらに同館の展示室写真、同館所蔵資料である画像・映像等を多数提供いただいた。同館の協力によって、地域独自の素材、ビジュアル性・具体性を備える素材が得られ、幅広い世代に情報が伝わりやすい話題提示が可能となった。出前講座用の教材開発では、北海道博物館(以下、道博)が所有する体験学習用資料も活用した。

プログラムは、各回1時間半～2時間として、「座学」、

グループ回想法を意識した参加者同士の談話である「思い出サロン(以下、サロン)」、「体験」等を組み合わせ、内容に多様性を持たせた。体験では、椅子を設置し、途中休憩を入れるなど、高齢者が、自身の身体の状況に合わせて、なるべく無理なく参加できるようにした。

(3) 行事で得られた効果

1) 開催実績と地域知の収集

こうして2018～2021年度にかけて、開発した14のプログラムを試行する行事を、朝日町で8回、智恵文で13回開催できた(表2、写真1)。運営スタッフを除く、延べ参加者数は、活動計画を策定した初回を含め、朝日町では68人、智恵文では202人であった。

智恵文では、クラブの会合がほぼ毎週定例開催されており、その枠を使って本行事を開催できたこと、後述のように小学校への出前授業を創出できたことから、朝日町と比べて行事を多数開催できた。

サロンでは、例えば、以下のように地域知が語られた。

旧土別御料林である広大な森林があり、林業地として発展した朝日町では、馬追いや木直し人夫の経験者により、造材作業で使われたヒツキリン⁽³⁾（写真2）やツメの付いたトビ⁽⁴⁾（写真3）の使い方、「鋭利なヒツ刃の部分で、てこの原理を働かせ、丸太を楽に動かせる」「ツメが丸太に食い込みトビが滑らなくなる」といった従来品と比べての利点が語られた。てこの原理で丸太を動かすトビは、刃の先端部が特に重要であることを示す「トビ先三寸（約9.1cm）」という言葉も挙げられた。

こうした回想は、1928年より朝日町で営業し、高品質のトビ製造者として有名だった後藤鉄工場のトビ製品のカタログを見たり、資料室の実物資料を手にして、動作を再現しながら行われた（写真2-3）。

一方、全道屈指の緬羊生産地としての歴史を持つ智恵文では、緬羊に給餌する女性が写る昭和期の写真を見ながら、緬羊は気質がおとなしく、女性や子どもが飼育を担い、厳冬期は、仔羊を茶の間に入れて大切に飼育したこと、また家で20頭もの緬羊を飼育していた男性からは、地区の有名な緬羊生産家だった山口 長氏（1908年生まれ）に指導を受けながら、性質のよい仔羊を探してタネメンヨウ（種牡羊）として育成したことなどが語られた。

紡毛機を使って羊毛から毛糸をつくる体験では、女性だけでなく、男性からも「紡毛機を使った経験がある」との声が挙がった。「母親に3本撚りの毛糸づくりをやらされた」「母に手袋を編んで欲しくて毛糸を紡いだ」といった思い出も語られた。「難しい」「昔は上手でできたけど」といった声が挙がりつつも、ペアを組んだ仲間と動作を協力し合い、羊毛を引き出す手とペダルを踏む足の動作を連動させて、紡毛技術が披露された（写真4）。

こうした地域知は、参加者同士で話すことで思い出すことができたり、より詳しい記憶がよみがえる場面があった。参加者からは「（普段、周囲では）関心をもって経験を聞いてくれる人がいない」「仲間で話すだけなら雑談で終わってしまうが、行事では経験を（地区の歴史・文化として）皆に紹介できる」といった行事の場を評価する声を得られた。参加者は、仲間と交流しながら、楽しさ、学習意欲、達成感を得ながら、行事に参加していた。

行事後は、プログラムとサロンの対話の書き起こし集を作成し、地域知を記録した報告資料として共催者等の関係者に提供した。青柳が記録したこれら地域知の詳細は、別稿として刊行予定である。

2) 協働関係の形成と各主体が得た効果

行事に参画した主体が、投入したもの（事業での役割）、獲得したもの（事業効果）を図1にまとめた。

これを踏まえ、2018年度開始当初と比べた関係性の変化、事業効果・波及効果として特に指摘できる点を以下に述べる。

a. 朝日町

主な事業効果

朝日町では、資料室は、行事を共催し、本行事に対して、会場、企画や要望、企画に合致する所蔵資料を提供し、知恵の蔵委員を始めとする参加者を調整した。一方、高齢者が参画する社会教育の拠点として活動使命を果たし、行事で参加者の地域知、地域資源を利用する技術が共有・記録されることで、地区内の地域資源や所蔵資料の情報が充実する効果を得た。

知恵の蔵は、同様に行事を共催し、本行事へ企画や要望を寄せ、委員が主たる参加者となり、地域知や技術を提供した。一方、サロンの話題の多様化など組織の年間事業の充実、歴史・文化の記録保存を通じた委員の社会参加といった効果を得た。

本行事の参加者は、委員、市教育委員会地域教育担当職員のほか、地区住民として、馬追い経験者の組織「初午会」会員、学習テーマに応じて、例えば天塩川の魚類や釣りに詳しい個人が参加して、地域知や技術を提供した。これら参加者は既述のように、行事から、楽しさ、学習意欲、達成感といった効果を得ていた。

波及効果：新規加入者の獲得と交流学习の充実化

そして、2020年度、地区からの住民参加者のうち2人が知恵の蔵に加入し、行事の開催は、知恵の蔵にとって新規加入者の獲得という波及効果があった。

また、朝日町では、2018年度より前から、「朝日の昔を語る会」、「環境学習（山野草学習・食体験、自然散策、しめ縄づくり等）」、「昔遊び体験」といった、知恵の蔵委員と児童・生徒が交流しながら、地区の自然・歴史・文化を学び伝承する、小・中学校と連携した交流学习事業を行ってきた。

「朝日の昔を語る会」は、2014年度から継続している中学生対象の対話型学習（青柳 2018a、2018b）で、2021年度は、「昔のくらし」（対象：朝日中学校1年生3人）、「商工業とくらし」（同2年生5人）、「農林業とくらし」（同3年生3人）の学年別の3テーマで講師役の委員らが経験を語った。

こうした既存の交流学习事業があることから、2018年度以降、改めて本行事に児童・生徒が参加することはなかったが、本行事での話題が、委員による生徒への語り活かされるなど、サロンで蓄積された地域知が、こ

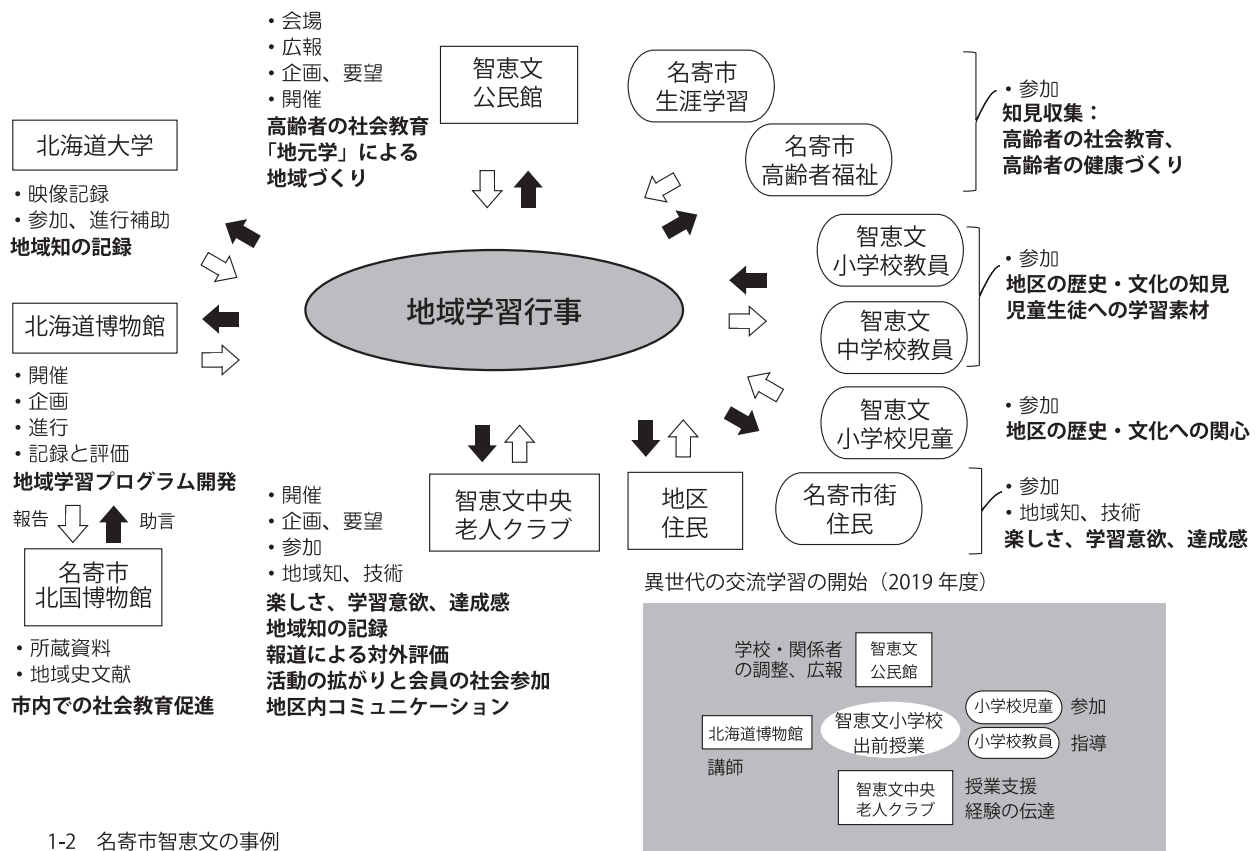
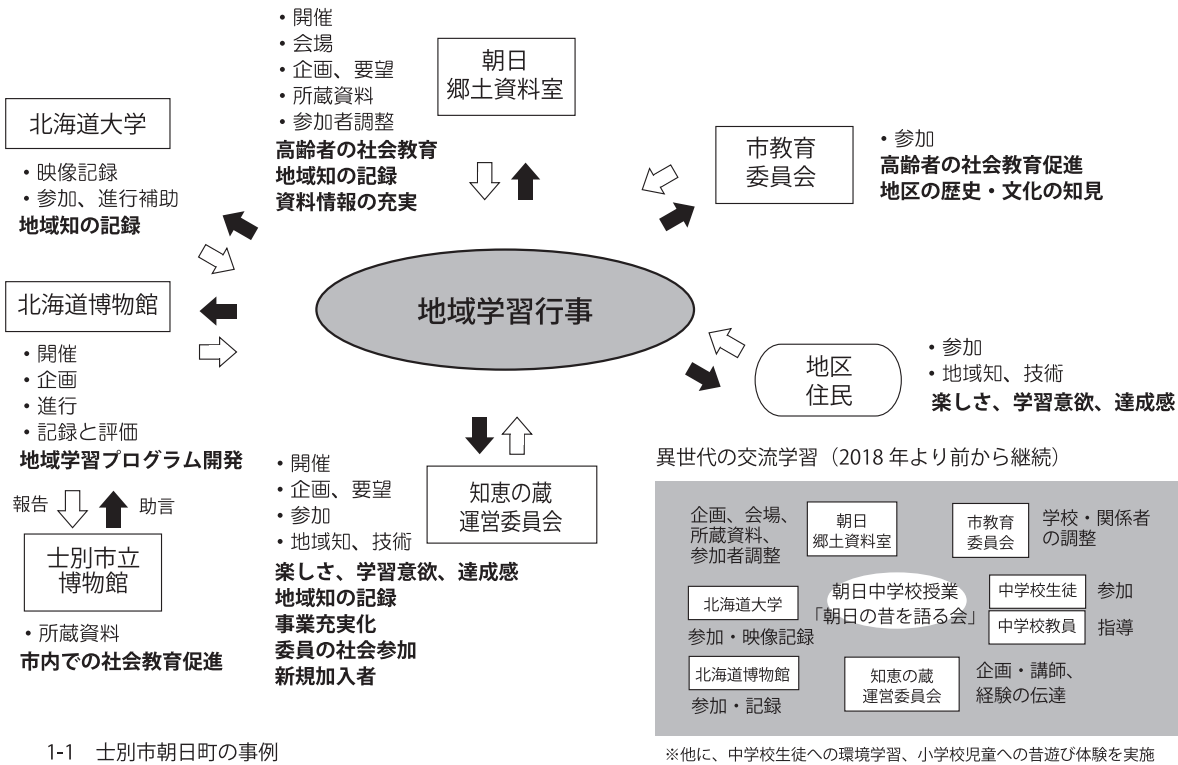


図1 地域学習事業への参画者（2018～2021年度）

注）丸ゴシックは行事に投入したもの、太ゴシックは行事から獲得したものを示す。
各主体のうち、長方形は2018年度開始当初からの参画者、角丸長方形はそれ以降の参画者を示す。

うした交流学习を下支えする基盤となった。

b. 智恵文

主な事業効果

智恵文では、まず、クラブは、行事を開催し、企画や要望を寄せ、主たる参加者としてクラブ員が行事に参加した。行事を通じて、クラブ員が持つ地域知や技術を、地区の歴史・文化として位置づけ、地域学習の場で、共有・記録できる場を得た。

次に、2018年度当初、公民館の役割は、行事に対して、会場を提供し、開催周知を広報するものだった。当時、公民館は、地域に根差した社会教育講座の提供を模索していた。本行事の内容や成果に触れる中で、公民館館長（当時）は、地域づくりの基礎となる、「地元学」（吉本 2008）の発想に基づく地域学習の重要性を認識するようになった。後述の2018年度4回目行事への智恵文小学校参加後は、公民館は、学習テーマへの要望を述べる等、企画にも参画するようになった。

波及効果①：出前授業の発足

地区内での学習機会を拡げる考えから、公民館が小学校との調整を行い、2019年度は、青柳を講師、クラブ有志を経験談を提供する学習支援者として、智恵文小学校への2回の出前授業「昔と今の米づくり」（対象：3年生4人、4年生3人；社会 単元「古い道具と昔の暮らし」（3年生）、同「わたしたちの県」（4年生）に対応、写真5）、「天塩川と智恵文」（対象：5年生7人；理科 単元「川と災害」に対応）が実施された。クラブ有志は、経験を次世代に伝える達成感、児童は、地区の歴史・文化への関心を得ることができた。

プログラム「天塩川と智恵文」は、一般参加の学習会と出前授業の双方が、公民館の報道案内によって地方紙2紙に掲載された。記事では「水害の記憶を語り合う」「児童に歴史、知恵を伝承」「児童が防災の大切さを学ぶ」等として、クラブ員の経験談や記憶が詳細に紹介され、関係者は改めて地域からの高い評価を知ることになった。

こうした波及効果を産み、母体となった本行事は、社会教育の場としての有効性が同館から評価され、2020年度より「ちえぶん学講座」として、クラブ、青柳、公民館の三者共催行事となった。公民館は、高齢者の社会教育、「地元学」による地域づくりといった、活動使命を果たす機会を充実化できた。

波及効果②：参加者多様化

ちらしが教員の目にとまり、2018年度4回目行事「馬の生産と飼育」には、智恵文小学校5年生7人、6年生2人、教員3人を含む23人参加し、賑やかに交流学习を開催できた。行事は、「地区の歴史・文化を掘り起こすも

ので、児童の学習機会になる」として、参加した校長（当時）から評価が得られた。2019年度からは、既述の智恵文小学校への出前授業が実現したほか、公民館からの後押しもあり、小・中学校教員が本行事へ継続参加するようになった。教員は、児童・生徒への学習素材を情報収集した。また、名寄市生涯学習担当職員、高齢者福祉担当職員が参加し、本行事から高齢者への社会教育、健康づくりの事例の知見を得た。

2020年度以降は、地方紙の報道が継続化し、名寄市街地からの参加者が毎回見られたり、新たなリピート参加者も現れるようになって、参加者が多様化していった。これら参加者は、行事から、楽しさ、学習意欲、達成感といった効果を得ていた。

波及効果③：老人会の活動拡がり

こうして行事は、出前授業へと発展したり、智恵文の特色ある活動として認知が進み、地区内をはじめ名寄市街地からも集客できる事業となった。2018-2021年度の行事の延べ参加者数は、既述のように202人となり（表2）、2018年度智恵文地区人口の47.4%に達した。

クラブ会員からは「毎回の開催が楽しみ」、「クラブの活動に拡がりがあった」との声が得られた。さらに「地区内で顔なじみが増え、挨拶をすることが増えた」といった声も得られ、行事は、防犯や見守り活動の基盤となる、コミュニケーションの活性化にも良い影響を与えた。

（4）コロナ禍への対応策と困難

2020年度、新型コロナウイルスの感染拡大により、北海道に政府の緊急事態宣言（1回目：4月16日～5月25日）が発令され、同年4月下旬～5月下旬は、2地区の活動拠点であった、資料室と公民館は臨時休館した。宣言が解除され、臨時休館終了後、同年6月19日からは、札幌市に居住する青柳の行事参加可否に関わる、道内都市間移動の制限等も解除された。しかし同年度以降の行事開催は、開催地自治体のガイドラインに従い、感染症拡大防止対策が必須となった。

行事の再開にあたっては、共催者らで相談の場を持ち、開催にあたって守ることをルール化し、必要な対策等を役割分担して行事運営した。

以下は、智恵文を事例に、主なルールを記載する。

- ① 感染症の小康状態が予想された夏～初秋期⁽⁵⁾に集中して行事を開催。
- ② 調理・食体験は実施しない。体験教材は共用しない。
- ③ 参加者の体調確認・検温。体調不良者は参加を控える。出入口にアルコール設置、参加者の緊急連絡先を把握。

- ④ 体験教材・会場等をアルコール消毒。
- ⑤ 三密を避け、従来の会合室（対策をした場合の定員14人）からホール（同60人）へ会場変更。マスク着用（簡易マスク配布）、距離をとった配席、窓を開放・1時間に1回換気休憩。
- ⑥ 発言者のマイク使用。音読（「学習」内で実施した、声を出してテキストを読むプログラム）は落ち着いた声で一人ずつリレー式で実施。
- ⑦ 毎回行事開始前に、手指消毒等、対策への協力を案内。
- ⑧ その他については、名寄市の感染症拡大防止・施設利用ガイドラインに沿った内容にて開催。

なお、マスク着用をはじめ、感染症対策をとることは、ちらしに明記した。さらに、公民館の報道案内を受けて、地方紙の予告記事にて、「感染症対策をして講座開催する」旨が広報された。

この結果、コロナ禍の2020～2021年度、智恵文で4回（2020年度3回、2021年度1回）、朝日町で4回（同3回、1回）の行事を開催できた（表2、写真6）。

行事1回あたりの参加人数（人）は、智恵文は、12.7（2018年度）、13.2（2019年度）、18.3（2020年度）、17.0（2021年度）となった。同様のルールを設け、行事实施した朝日町では、同様に10.5（2018年度）、10.0（2019年度）、7.7（2020年度）、11.0（2021年度）となった。

コロナ禍前（2019年度以前）とコロナ禍（2020年度以降）の数値を比べると、朝日町の減少・横ばい傾向に対して、智恵文では増加傾向が見られた。智恵文では、2020～2021年度の全行事に、毎回初参加者があった。

この理由としては、オープン参加型の智恵文では、既述の地方紙による本行事の報道が有効に働いたこと、適切な感染症対策が取られたことが参加者の安心・安全の実感につながったこと、後述のアンケート結果のように、講座の楽しさ、面白さなどが参加者に徐々に共有されたことが考えられる。これらは初参加者やリピート参加者を増やし、現役世代を含む多様な参加者を得ることにつながった。

他方、2021年度は、北海道に政府の緊急事態宣言2回目（5月16日～6月20日）～3回目（8月27日～9月30日）が発令され、同年5月中旬～6月中旬、8月末～9月末にかけて、資料室と公民館は再度臨時休館した。2回目の同宣言解除後も、札幌市等との都市間移動の制限等の措置が継続した。

こうした臨時休館のほか、感染力の強い変異株による感染拡大、地方都市でのクラスターの多発への懸念などもあり、上記のルールによっても、参加者の安全・

安心を確保した行事開催は困難となり、行事延期が継続した。2021年度行事は、3回目の同宣言解除後、朝日町、智恵文での各1回の開催に留まった。智恵文での出前授業は、外部講師の参加を控える学校の意向もあり、2021年度は開催中止となった。

3 地域学習プログラムの評価

行事参加者へのアンケートの結果、朝日町では9、智恵文では17の回答が得られた。

（1）回答者の属性

回答者の属性について、性別は、朝日町では「男性」（88.9%）、智恵文では僅差で「女性」（52.9%）、全体では「男性」（61.5%）が多数だった（表3）。夫婦での参加が見られた智恵文に対し、朝日町では、2018年以降、高齢化による委員の退会、体調不良等で、女性委員の出席が減っており、それが反映された結果となった。

表3 性別

地域区分 回答区分	朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
男性	8	88.9	8	47.1	16	61.5
女性	1	11.1	9	52.9	10	38.5
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

年齢は、朝日町では「75～84歳」と「85歳以上」（各33.3%）、智恵文では「75～84歳」（47.1%）、全体では「75～84歳」（42.3%）が最多だった。75歳以上である後期高齢者比率は、朝日町で66.7%、智恵文でおよそ76.5%（無回答1）、全体では73.1%となった（表4）。参加者の高齢化が顕著に見られた一方で、行事は「高齢者が参加できる場所」として機能していた。

表4 年齢

地域区分 回答区分	朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
64歳以下	1	11.1	2	11.8	3	11.5
65～74歳	2	22.2	1	5.9	3	11.5
75～84歳	3	33.3	8	47.1	11	42.3
85歳以上	3	33.3	5	29.4	8	30.8
無回答	0	0.0	1	5.9	1	3.8
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

そして、参加開始年は、朝日町では「2018年度より前から参加」（100.0%）が最多、智恵文では「2018年から参加」（41.2%）が最多で、次いで「今回が初参加」（29.4%）が多数だった。会場での観察からは、智恵文では誤回答が含まれ、初参加者は3（17.6%）と考えられたが、この修正値であっても初参加者の比率は比較的高かった。既存行事の場を活用した朝日町のクローズ参加、2018年から継続して新規参加者を増やしてきた智恵文のオープン参加の特色が現れた結果となった。

全体では「2018年度より前から参加」（34.6%）が最多だった（表5）。

表5 参加開始年

回答区分	地域区分 朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
今回が初参加	0	0.0	5	29.4	5	19.2
2020年から参加	0	0.0	4	23.5	4	15.4
2019年から参加	0	0.0	1	5.9	1	3.8
2018年から参加	0	0.0	7	41.2	7	26.9
それより前から参加	9	100.0	0	0.0	9	34.6
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

(2) 行事の評価

1) 行事に参加してよかったこと

まず、行事に参加してよかったこととして、朝日町では、「昔の暮らしについて実際に経験した人の話を聞いた」「皆で取り組むことで歴史の掘り起こし・記録ができた」（各77.8%）が最多だった。智恵文では「昔の暮らしについて実際に経験した人の話を聞いた」「昔のことを思い出して、心が元気になった」（各76.5%）が最多で、次いで「新しいことを学んだ」（64.7%）も僅差で多数だった。

全体では、「昔の暮らしについて実際に経験した人の話を聞いた」（76.9%）が最多となった（表6）。

表6 行事に参加してよかったこと〔複数回答可〕

回答区分	地域区分 朝日町(N=9)		智恵文(N=17)		全行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
経験者の話を聞いた①	7	77.8	13	76.5	20	76.9
新しいことを学んだ②	5	55.6	11	64.7	16	61.5
思い出で心が元気③	2	22.2	13	76.5	15	57.7
歴史の掘り起こし・記録④	7	77.8	7	41.2	14	53.8
コロナ禍でも気分転換⑤	2	22.2	7	41.2	9	34.6
多様な人と交流⑥	5	55.6	2	11.8	7	26.9

注) 回答総数は、朝日町28、智恵文53、全体81である。

1) 回答者あたりの選択肢回答数は、朝日町3.1、智恵文3.1、全体3.1である。

両地区とも、行事で高齢者の経験談を聞けることが多数から評価された。さらに、2006年から委員が記憶を語るサロンを継続してきた朝日町では、行事が持つ、地区の歴史・文化のアーカイブ機能への評価が多数を占めた。一方、行事を新規創出した智恵文では、行事が持つ、心の健康を維持させる機能への気づき、新たな知識の獲得を評価する回答が多数だった。

2) 項目別評価

次に、項目別評価では、肯定的回答（該当度4-5の合計比率）を見ると、朝日町では、「地域の人と一緒に、昔のことをおしゃべりしたり体験する活動がおもしろくなった」（表7）、「気づいていなかった地域の魅力について学べた」（表8）、「行事に参加して楽しい思い出が増えた」（表12）（各88.9%）が最多だった。

智恵文では「行事に参加して楽しい思い出が増えた」（表12、94.1%）が最多、次いで「地域の歴史や文化に愛着がわいた」（表9、88.2%）が多数だった。

全体では、「行事に参加して楽しい思い出が増えた」（表12、92.3%）が最多、僅差で「地域の歴史や文化に愛着がわいた」（表9、84.6%）が多数となった。

3) 小括

以上の回答を概観すると、既述の3つの行事目的に対応する、「心の健康づくり」（表6-③）、「記録・保存」（表6-④）、「伝承」（表6-①）ができたことに、過半数の回答が見られ、事業目的の達成が確認できた。なお、地区別で見ると、朝日町では、「心の健康づくり」は22.1%と比較的少数だった。朝日町では、2006年よりサロンを継続しているが、参加が習慣化する中で、心の健康維持に関するサロンの効用が実感されづらくなっていた。

今後は、高齢者医療、福祉関係者の協力を得て、より積極的にプログラムに健康維持や介護予防の要素を盛り込み、参加者の健康を評価してフィードバックする仕組み

表7 地域の人との活動が面白くなった（関心）

回答区分	地域区分 朝日町		智恵文		全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
該当度1	0	0.0	1	5.9	1	3.8
該当度2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度3	1	11.1	0	0.0	1	3.8
該当度4	4	44.4	7	41.2	11	42.3
該当度5	4	44.4	6	35.3	10	38.5
無回答	0	0.0	3	17.6	3	11.5
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

表8 地域の魅力を学べた（知識）

回答区分	地域区分 朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
該当度1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度2	0	0.0	1	5.9	1	3.8
該当度3	1	11.1	1	5.9	2	7.7
該当度4	5	55.6	5	29.4	10	38.5
該当度5	3	33.3	8	47.1	11	42.3
無回答	0	0.0	2	11.8	2	7.7
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

表9 地域の歴史・文化に愛着（態度）

回答区分	地域区分 朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
該当度1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度3	2	22.2	1	5.9	3	11.5
該当度4	6	66.7	10	58.8	16	61.5
該当度5	1	11.1	5	29.4	6	23.1
無回答	0	0.0	1	5.9	1	3.8
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

表10 歴史・文化を子供達へ伝承したい（態度）

回答区分	地域区分 朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
該当度1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度2	0	0.0	1	5.9	1	3.8
該当度3	2	22.2	4	23.5	6	23.1
該当度4	3	33.3	5	29.4	8	30.8
該当度5	4	44.4	5	29.4	9	34.6
無回答	0	0.0	2	11.8	2	7.7
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

表11 思い出を回想できた（技能）

地域区分 回答区分	朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
該当度1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度3	4	44.4	4	23.5	8	30.8
該当度4	3	33.3	6	35.3	9	34.6
該当度5	2	22.2	6	35.3	8	30.8
無回答	0	0.0	1	5.9	1	3.8
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

表12 楽しい思い出増えた（参加）

地域区分 回答区分	朝日町		智恵文		行事参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
該当度1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
該当度4	5	55.6	9	52.9	14	53.8
該当度5	3	33.3	7	41.2	10	38.5
無回答	1	11.1	1	5.9	2	7.7
合計	9	100.0	17	100.0	26	100.0

みを整備することが重要と考えられた。

1回答者あたりの選択肢回答数は地区別・全体とも3.1個と比較的少数だったが、「感染症対策をとった行事参加で、コロナ禍でも気分転換できた」（表6-⑤、34.6%）が全体の1/3を超える比率を占め、既述の感染症対策への対応についても一定の評価を得ることができた。

他方、行事目的にも関連する「多様な交流」（表6-⑥、26.9%）は、比較的少数であった。リピート参加を促すと共に、老若世代や地域内外の参加者を得て、参加者を一層多様化させていくことは、両地区とも、感染症収束後の継続的な課題と考えられた。

項目別評価では、地域学習への関心（表7）、知識（表8）、態度（表9・10）、技能（表11）、参加・楽しさ（表12）の獲得に関する各項目について、中程度以上の達成（該当度4-5の合計比率）が全体で60%以上と多数だった。

特に高い評価が多数だった「行事に参加して楽しい思い出が増えた」（表12）は、心の健康やウェルビーイングにも関わり、また「気づいていなかった地域の魅力について学べた」（表8）、「地域の歴史や文化に愛着がわいた」（表9）は、地域学習が目指す、地域志向や地域づくりの核となる内容である。行事によって、多数の参加者が、参加する楽しさ、地域への関心の深化、学習への達成感を得たことが示唆された。

（3）ウェルビーイング

1) 主観的幸福感

まず、「年をとるということは、若い時に考えていたよりもよいことだ」は、朝日町では「同じ」（66.7%）、智恵文では「よい」（41.2%）が最多で、行事参加者全体では「同じ」（38.5%）が最多だった。一方、上川北

部地域居住の高齢者を対象とした既存結果（以下、上川北部高齢者）では、「悪い」が最多48.6%だった。

「行事参加者全体」と「上川北部高齢者」の回答区分の分布には有意差が見られ、行事参加者は、上川北部高齢者よりも「悪い」の比率が有意に低かった（表13）。

次に、「自分の今の生活に満足している」について、朝日町では「はい」（66.7%）、智恵文でも「はい」（52.9%）が最多で、全体では「はい」（76.9%）が最多だった。行事参加者全体の肯定的回答（「はい」76.9%）は、上川北部高齢者（「はい」86.5%）をやや下回ったが、両者の回答分布に有意差はなかった（表14）。

表13 年をとるということは若い時と比べて

調査区分 回答区分	朝日町		智恵文		行事参加者全体		上川北部高齢者	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
よい	1	11.1	7	41.2	8	30.8	9	24.3
同じ	6	66.7	4	23.5	10	38.5	9	24.3
悪い**	1	11.1	3	17.6	4	15.4	18	48.6
無回答	0	0.0	3	17.6	3	11.5	1	2.7
計	8	88.9	17	100.0	25	96.2	37	100.0

注1) χ^2 検定により回答区分の分布は、「行事参加者全体」と「上川北部高齢者」で異なる($p<0.01$)

注2) 残差分析により「行事参加者全体」と「上川北部高齢者」で差がある(**: $p<0.01$)

表14 生活への満足

地域区分 回答区分	朝日町		智恵文		行事参加者全体		上川北部高齢者	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
はい	6	66.7	14	52.9	20	76.9	32	86.5
いいえ	2	22.2	2	35.3	4	15.4	2	5.4
無回答	1	11.1	1	11.8	2	7.7	3	8.1
計	9	100.0	17	100.0	26	100.0	37	100.0

2) 主観的健康感

「去年と同じように元気だ」について、朝日町では「いいえ」（55.6%）、智恵文では「はい」（82.4%）が最多で、全体では「はい」（50.0%）が最多だった。

行事参加者全体の肯定的回答（「はい」50.0%）は、上川北部高齢者（「はい」64.9%）を下回ったが、両者の回答分布に有意差はなかった（表15）。なお、表13-15は、「朝日町と上川北部高齢者」、「智恵文と上川北部高齢者」を対象とした同様の解析でも、回答分布に有意差はなかった。

表15 去年と同じに元気

地域区分 回答区分	朝日町		智恵文		行事参加者全体		上川北部高齢者	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
はい	4	44.4	9	82.4	13	50.0	24	64.9
いいえ	5	55.6	6	11.8	11	42.3	12	32.4
無回答	0	0.0	2	5.9	2	7.7	1	2.7
計	9	100.0	17	100.0	26	100.0	37	100.0

ここで、上川北部高齢者データは65歳以上を調査対象としており、その内訳は、「65～74歳」27.0%、「75～84歳」62.1%、「85歳以上」10.9%である。他方、行事参加者の年齢構成（表4）は、「75歳以上」は73.1%とほぼ同比率だったが、「85歳以上」が30.8%と多数を占め、上川北部高齢者と比べて、より高齢な人が多く対象とされていた。

一般的に年齢が増加するほど、身体能力の衰えや老年性うつなどの症状が現れやすい。今回見られた、否定的回答の低さ（表13）、そして両調査で有意差がない結果（表14・15）は、行事参加者の主観的幸福感、そのベースとなる主観的健康感が相対的に高いことを示唆している。

行事には、日頃から主観的幸福感、主観的健康感の高い人々が参加した可能性はある。しかし、さらに行事の場で、経験を語り合い、新しいことを学ぶ楽しさ等を実感でき、さらには心の元気や学習の達成感などを得たことが肯定的に評価され、彼らの高い主観的ウェルビーイングが維持されたと考えられた。

4 成果の発信と巡回展事業

（1）成果の発信：巡回展事業の準備

1) ホームページ・フェイスブックページの整備

共同研究の内容・成果を情報発信し、最終成果のユーザーを開拓したり、高齢者の地域知を異世代にも広げる目的で、前年度からの製作期間を経て、2019年度に「博物館を拠点とする地域資源活用研究会（みゅぜけん）」ホームページ（HP、写真7）とフェイスブックページ（FB）を公開した。HPの作成と更新は山下が、FBの更新は青柳が担当した。

HPは研究概要、映像アーカイブ、論文等紹介、著者3人の輪番執筆による研究ブログ等から構成される。一方、FBは、画像をメインとした短文の活動報告、研究日誌である。この2種を相互補完的に使用して情報発信することとした。

公開したページは、モデル地の高齢者らに画面を紹介して共有した。ページは、公民館館長・智恵文小学校教頭（当時）らから、「今後の活動の励みになる」「多くの人に知らせたい内容」として評価されたほか、一部の高齢者には、後日、孫と一緒にページにアクセスするなどの行動もあった。これらのページは、関係者や高齢者の地域学習へのやりがいの維持にも役立てることができた。

こうした情報発信基盤整備の結果、例えばモデル地で地域学習への協力を得たり、現役世代の新規参加者にリピート参加を促す際などに、研究を対外的に示しやすくなった。このことは後述の巡回展事業において、開催館募集や展示会観覧者への情報伝達を容易にすることにもつながった。

2) 道博クローズアップ展示として成果公開

研究成果を使用して、巡回展の展示製作上のヒントを得るため、青柳が分担した地域学習の成果の一部を、道

博総合展示室のクローズアップ展示（期間限定入替展示）にて、「馬迫いの道具」をタイトルに、2020年8月14日（金）～12月16日（水）に公開した（写真8）。

本展示は、経験がない世代や都市居住者もわかりやすく観覧できるように工夫した。すなわち、トビ、角まわしの使い方、丸太を馬そりへ効率的に積み込む方法などをビジュアルで学べる、昭和期の写真資料や技術の再現画像のパネル、短編映像（写真9）を作成し、これらパネル、短編映像に登場する実物資料と共に展示した。

本展示は、コロナ禍での公開となったが、期間中、学校団体や高齢者などを中心に25,564人の観覧者が得られた。体系的な情報収集によるものではないが、観覧者からは「パネルと実物資料の対応がわかりやすい」「技術を再現する高齢者の笑顔がよい」「今、記録しないと技術が失われてしまう貴重な映像」といった、展示を評価する反応を得ることもできた。こうして、パネル、映像、実物資料を組み合わせ、高齢者の地域知や地域学習プログラムを伝達する展示手法を試行し、その可能性を確認できた。

（2）巡回展事業

1) 開催概要と実施体制

巡回展事業は、2018年度からの5カ年の研究の中間成果として、2021年度に実施し、モデル地がある道北地区内の博物館・公民館にて開催することとした。

展示会のタイトルは「探してみよう！ 地域のお宝」とし、地域学習の主要なテーマとなった、「冬山造材」「緬羊の利用」「馬を使った米づくり」をキーワードに、この学習プログラムを紹介することとした。

また展示会は、認知症予防プログラム等をパネルで紹介し、地域のお宝（地域資源）に関連した映像アーカイブを展示するなど、著者3人の共同研究の成果を普及する内容とした。

さらに、上記3つのキーワードに関連した、開催館の所蔵する実物資料を合わせて展示可能とした。こうして、共通して巡回させる展示物と、開催地の実物資料とを、観覧者が比較でき、双方の観察を通じて、開催地の歴史・文化への関心を促す仕掛けとした。合わせて希望する館には、映像視聴と参加者の談話を内容とする、関連講座を開催することとした。

展示会の目的は、主に以下の3点とした。

- ①地域資源をわかりやすく学習する機会を提供する。
- ②開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供する。
- ③博物館での高齢者プログラム実践のノウハウを提供する。

巡回展開催の実施体制構築のため、道北地区博物館等

連絡協議会事務局から協力を得て、展示会場となる開催館を募集した。この結果、4館（士別市立博物館、名寄市北国博物館、美深町文化会館COM100、美瑛町郷土学館）の応募があった。こうして、本科研究費研究の受託機関である道博、そしてこの4つの開催館との共催で、展示会を実施する体制ができた。企画製作は、道博と博物館を拠点とする地域資源活用研究会が担うこととした。

2) 展示製作の概要とそこでの工夫

展示製作は、著者3人で役割分担して進め、パネルで使用する写真や映像は、モデル地の協力組織・機関や開催館等から資料提供を受けた。

パネルは、地域学習プログラム（担当：青柳）、映像

アーカイブの楽しみかた（担当：山下）、認知症・フレイル予防プログラム（担当：黄）の内容で構成した。

「3世代で楽しめる展示」を意図し、小学校4年生程度の子どもにも理解しやすいように画像や図を多用し、クイズ形式なども盛り込んだ、平易で親しみやすい内容（7枚）を含む18枚とした。

映像展示は、山下が担当し、パネルに対応した4テーマ（冬山造材、緬羊の利用、馬を使った米づくり、映像アーカイブの楽しみ方）について、サイネージ4台で上映した。映像は、モデル地で撮影した短編映像と、開催館の所蔵映像とを活用した。ナレーションや出演した高齢者の語りを書き起こし、大きな文字サイズの字幕としてつけるなど、ユニバーサル・デザインに配慮して再編集した（写真10）。

表16 巡回展の開催概要と開催館担当者アンケート結果

開催館・展示会場	士別市立博物館	美深町文化会館COM100 (ギャラリー)	美瑛町郷土学館
1 会期[観覧者数]	7/24～8/22(20日間) [394人]	10/9～10/26(18日間)[340人]	12/4～12/30(23日間)[309人]
2 関連講座[参加者数]	8/7開催[11人]	開催なし	12/18開催[13人]
3 アンケート結果			
1) 観覧者の属性			
(1) 多かった年齢層	高齢者(概ね65歳以上)	高齢者(概ね65歳以上)	子ども(概ね20歳未満)
(2) 多かった利用形態	一人、親子連れ	一人	学校団体
2) 巡回させた展示物			
(1) パネル(18枚)	全部展示できた	全部展示できた	全部展示できた
(2) サイネージ(4台)	全部展示できた	全部展示できた	全部展示できた
(3) 展示の作りやすさ	作りやすかった: パネル掲載がある(林業用)厚刃物や農機具といった所蔵資料を展示できた	作りやすかった	作りやすかった
3) 展示会を開催してよかったこと			
	・地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた ・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた ・開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供できた ・博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた	・地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた ・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた	・開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた ・博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた
4) 運営上の苦労点(自由記載)			
	・展示スペースの広さ: パネル、映像、大型の実物資料とでスペースが手狭。広ければより充実した展示を作ることができたと感じた。	・特になし	・展示スペースの広さ: 広くなかったが、パネルと所蔵資料をうまく組み合わせで展示作りができた。 ・ちらしの文字サイズ等: 巡回施設すべてが掲載されており、高齢者向けでは文字などが小さいかなと思った。既存ちらしは館内等で配布し、当会場オリジナルちらしを作成して町の広報誌に折込した。
5) 感想(自由記載)			
	・展示室で道具の使い方など老若世代の対話が見られた。高齢者のQOL向上、近い時代の歴史の掘り起こしにとってもよい展示。 ・観覧者が展示物の道具の思い出等を書けるアンケートを作ってもよかったと事後に感じた。	・特になし	・会期中、町内のコメ作りや入植を学ぶ目的の小学校による見学があり、今回の展示内容がぴったりとフィットした。 子どもたちはコメ作りや造材での馬の活躍に驚いていた。 ・お年寄りには、「道具の使い方を教えてあげる」という方もおられ、動作が含まれた映像の持つ力を感じた。 ・当地域でも映像作成について同様の取り組みができないかを考えていきたい。

注) 名寄市北国博物館で予定されていた展示会と関連講座は、緊急事態宣言発令に伴う臨時休館のため中止となった。

関連講座は、タイトルを「比べる視点で 地域映像を愉しむサロン」とし、山下が担当して企画や開催館との調整を行った。講座で上映した映像は、展示映像の他、その地域に残る映像を開催地毎に作り替えて使用するなどの工夫をした。そして、幅広い世代が関心をもって視聴でき、映像に写る地域資源への理解を深めながら、撮影地の違いや現在との違い等を観点に、映像を見比べて楽しめる内容とした。

展示会と関連講座の広報は青柳が担当し、道博のHPとツイッター、既述の研究会FB、HPブログ（土別会場について山下執筆）のほか、開催館・協力機関の手配により、ちらし、ポスター、開催館HPやニュースレター、自治体広報、地方紙記事等で告知した。名寄市北国博物館による執筆協力を得て、本巡回展事業の紹介記事が、「道博協ニュース第129号」（北海道博物館協会2021年10月発行）に掲載され、道内博物館園関係者に本事業のねらいや見どころをPRすることもできた。

これら一連の展示製作・講座準備作業は、情報共有・課題解決のため、黄が設定・管理するオンライン会議によって著者3人で議論しながら進行させた。著者らは、札幌、函館、名寄と居住地が分散しており、加えて、これらは面会しての打ち合わせが困難なコロナ禍の中での作業となったが、この月1回程度のオンライン会議の開催と、メールの使用によって、関係者の協力もあり計画的に進行させることができた。

こうして、緊急事態宣言の発令に伴う臨時休館のため開催延期された名寄会場をのぞき、3会場で、展示会と関連講座（写真11）を開催できた（表16）。全ての会場で、開催館所蔵の実物資料・写真資料等を展示して、これら資料とパネルや展示映像と見比べながら楽しめる仕掛けが作られ、各館の所蔵コレクションの厚みを反映させた、個性ある展示が実現できた（写真12-14）。

5 アンケートによる巡回展事業評価

（1）開催館担当者へのアンケート

開催館担当者へのアンケートでは、3館より3の回答が得られた。展示会の開催概要と回答結果を表16に示した。

まず、観覧者属性について、多かった年齢層は、土別と土別では「高齢者（概ね65歳以上）」、美瑛では「子ども（概ね20歳未満）」であった。

そして利用形態は、土別では、「一人」・「親子」で観覧、美深では、「一人」、美瑛では「学校団体」であった。高齢者と一人での観覧を中心とする土別と美深、子ども・学校団体という若い世代を中心とする美瑛とで、回答が分かれる結果となった。本展示会は「3世

代で楽しめる」を意図したが、親子を含む老若世代に対応できていた。

展示の作りやすさについて、パネル、映像は全ての会場で「全部展示できた」、「展示を作りやすかった」との回答が得られた。

次に、展示会を開催してよかったことについて、全ての会場で「開催館所蔵資料を活用して展示づくりができた」が挙げられた。テーマに合致する所蔵資料を、開催館の事情に合わせて柔軟に調整して紹介できたことが評価された。展示会の3つの事業目的との関連では、「①地域資源をわかりやすく学習する機会を提供できた」は土別と美深で、「②開催地の歴史・文化のよさ、地域の魅力を再発見する機会を提供できた」は土別で、「③博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた」は土別と美瑛で回答が見られた。

このように会場で回答の違いがあり、十全ではなかったが、設定した事業目的について一定の達成が見られた。注目すべきは、展示会と合わせて関連講座を開催した2会場で、「③博物館での高齢者プログラム実践のノウハウが得られた」の回答が得られたことである。開催館所蔵資料を含む地域映像を活用し、高齢者の参画による異世代交流型の行事を開催館と共催したことで、プログラムで使用する素材、その他の必要物品の調達、当日の進行、行事評価（アンケート）、行事の記録と書き起こし資料のまとめといった具体的な運営手法を、担当者に実地に伝えることができたと思われる。

特に、美瑛では、後述の感想（自由記載）で映像製作・活用への意欲を示す回答や、講座開催後に「今後同様の企画を行ってみたい」旨のコメントも得られた。地域学習を広域に拡げる普及方法として、単なる講師派遣ではなく、現地の組織・機関との協働でプログラムを企画・運営する共催の手法が有効であると考えられた。

運営の苦労点としては、展示スペースの広さ（土別・美瑛）、ちらしの文字サイズ等（美瑛）があげられた。

感想では、老若世代の対話（土別）や文化伝承への意欲（美瑛）に結びついたり、高齢者のQOL向上、彼らが経験した歴史の掘り起こし（土別）によい展示であることを示す回答が得られた。智恵文小学校との打ち合わせを経て作成し、本展示会で紹介した地域学習プログラム「馬を使った米づくり」と学校授業との題材の合致（美瑛）を述べる回答も得られた。

（2）講座参加者のアンケート

講座参加者のアンケートでは、土別では11、美瑛では13の回答が得られた。

まず、回答者の属性について、性別は、2会場とも「男性」（土別90.9%、美瑛76.9%）が多く、全体でも

「男性」が83.3%と多数を占めた（表17）。

表17 性別

会場区分 回答区分	士別市		美瑛町		講座参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
男性	10	90.9	10	76.9	20	83.3
女性	1	9.1	3	23.1	4	16.7
合計	11	100.0	13	100.0	24	100.0

年齢は、士別では「65～74歳」と「75～84歳」（各36.4%）、美瑛では「75～84歳」（46.2%）、次いで「64歳以下」（38.5%）が多数だった。全体では「75～84歳」（41.7%）が最多だった。

「64歳以下」の内訳は、士別は30代と40代が各1、美瑛では12歳以下の小学生が3、50代が2だった。なお士別では、本アンケートには回答しなかったが、小学生1人の講座参加があった。

75歳以上である後期高齢者比率は、士別で45.5%、美瑛で46.2%、全体で45.8%となり、高齢化が見られたが、特に美瑛では年齢層が比較的多様となっていた（表18）。

表18 年齢

会場区分 回答区分	士別市		美瑛町		講座参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
64歳以下	2	18.2	5	38.5	7	29.2
65～74歳	4	36.4	2	15.4	6	25.0
75～84歳	4	36.4	6	46.2	10	41.7
85歳以上	1	9.1	0	0.0	1	4.2
合計	11	100.0	13	100.0	24	100.0

展示観覧の有無は、2会場とも「展示を見た」が最多（士別63.6%、美瑛38.5%）で、全体で50.0%を占めた（表19）。展示と講座の会場が別となった士別でも、当日に誘い合わせて展示を観覧後に、講座に参加した回答者が見られ、観覧者が過半数となった。

なお美瑛では、観覧者が比較的小数にとどまったが、講座終了後、階下の展示室に移動して、講座での談話を継続する形で、思い出を語りながら展示観覧した回答者が多数見られた。

表19 展示を見たか

会場区分 回答区分	士別市		美瑛町		講座参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
見た	7	63.6	5	38.5	12	50.0
見ていない	1	9.1	4	30.8	5	20.8
見ていないがこれから見る予定	2	18.2	3	23.1	5	20.8
無回答	1	9.1	1	7.7	2	8.3
計	11	100.0	13	100.0	24	100.0

「展示を見た」とした回答者（士別N=7、美瑛N=5）について、展示の満足度は、士別では満足度4（42.9%）、美瑛では満足度3（40.0%）、全体では満足度3と4（各33.3%）が最多だった。中程度以上の回答（満足度4-5の合計比率）は士別57.1%、美瑛40.0%、全体で50.0%を占めた（表20）。

展示のよかった点は、士別では、「昔のことを思い出

表20 展示の満足度

会場区分 回答区分	士別市		美瑛町		講座参加者全体	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
満足度1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
満足度2	1	14.3	1	20.0	2	16.7
満足度3	2	28.6	2	40.0	4	33.3
満足度4	3	42.9	1	20.0	4	33.3
満足度5	1	14.3	1	20.0	2	16.7
合計	7	100.0	5	100.0	12	100.0

して、心が元気になった」（57.1%）、次いで「地域のお宝（地域資源）や、その学習活動に関心をもった」（42.9%）が多数だった。美瑛では、「地域に残る映像の面白さや、楽しみかたがわかった」と「地域の歴史や文化のよさに気づき、愛着がわいた」（各80.0%）が最多だった。全体では「昔のことを思い出して、心が元気になった」と「地域に残る映像の面白さや、楽しみかたがわかった」（各50.0%）が最多だった（表21）。

結果を概観すると、観覧者に向けた、展示会の事業目的に関連する、「地域のお宝や、その学習活動に関心をもった」「地域のお宝を利用する知恵や技、道具の使い方を学べた」（目的①に対応）は全体で約30～40%、「地域の歴史や文化のよさに気づき、愛着がわいた」（目的②に対応）は同様に約40%を占めた。データ数が少なく、また高比率ではなかったが、事業目的の一応の達成が見られた。

そして、1回答者あたりの選択肢回答数は、全体で2.8個と比較的小数だったが、「地域に残る映像の面白さや、楽しみかたがわかった」（50.0%）、「高齢者の健康や認知症予防プログラムについて学べた」（16.7%）も比較的小数を占め、共同研究の成果の普及もできた。

表21 展示のよかった点

会場区分 回答区分	士別市(N=7)		美瑛町(N=5)		講座参加者全体(N=12)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
思い出で心が元気	4	57.1	2	40.0	6	50.0
映像の楽しみ方わかる	2	28.6	4	80.0	6	50.0
地域のお宝・地域学習に関心	3	42.9	2	40.0	5	41.7
地域文化に愛着	1	14.3	4	80.0	5	41.7
利用する知恵や技を学習	2	28.6	2	40.0	4	33.3
昔の話を聞きたい意欲	1	14.3	2	40.0	3	25.0
地域のお宝を伝えたい意欲	1	14.3	1	20.0	2	16.7
認知症予防プログラムを学習	1	14.3	1	20.0	2	16.7

注) 回答総数は、士別市15、美瑛町18、全体33である。

1回答者あたりの選択肢回答数は、士別市2.1、美瑛町3.6、全体2.8である。

6 まとめと考察

(1) まとめ

1) 地域学習プログラムの開発と実践

地域博物館・公民館が拠点施設となり、朝日町では7、智恵文では12の組織・機関の協働関係によって、地域学習行事を開催する仕組みが作られ（図1）、2地区計で23回、14のプログラムを開発・試行できた（表2）。朝日町では、地域知の記録によって資料室の資料情報が充実したり、知恵の蔵に新規加入者が得られるな

どの波及効果が見られた。智恵文では、「地元学の発想による地域づくり」という問題意識の共有によって公民館との連携が強化し、公民館、青柳、クラブの参画による小学校への出前授業や3者共催講座が実現できた。行事によってクラブの活動に拡がり生まれ、地区内コミュニケーションが活性化するなどの効果もあった。

関係組織・機関の協力のもと、感染症対策をした行事開催のルールを設けたことで、2020年度以降、コロナ禍でも行事を継続できた(表2)。智恵文では、地方紙による報道の後押し等もあり、現役世代や名寄市街からの参加者が得られ、2020年度は行事参加者数が増加した。反面、感染症の感染拡大が長期に及んだ2021年度の行事開催は、2地区とも各1回に留まった。

2) 地域学習プログラムの評価

行事参加者へのアンケートでは、高齢者の心の健康、歴史文化の保存・記録、異世代の伝承に関連した肯定的評価が過半数(表6)で、3つの事業目的の達成が概ね確認できた。一方で、サロンを長期にわたって継続している朝日町では、「心の健康づくり」達成への課題も見られた(表6)。

そして、項目別評価では、地域学習への参加による楽しさ(表12)、地域の魅力への気づき(表8)、地域の歴史・文化への愛着(表9)等に関する回答も多数で、地域への関心の深化や地域学習への達成感が得られていた。行事参加者は、高齢な人の比率が高かったが(表4)、上川北部高齢者よりも相対的に高い(表13)、または同程度(表14)の主観的幸福感、同程度の主観的健康感(表15)が見られた。

3) 巡回展事業の評価

HP、SNSページの公開といった情報発信基盤の整備、道博での展示試行を経て、2021年度、道北地区3市町で巡回展事業を実施した。コロナ禍の中での開催であったが会期中、3会場計で1,043人の観覧者を得ることができた(表16)。そして、「探してみよう! 地域のお宝」を共通テーマに、会場ごとに異なる開催館所蔵資料を活用した展示(表16-3-3)、写真12-14)を公開できたほか、開催館と事業を共催したことで、高齢者プログラム実践のノウハウ伝達を含む、3つの事業目的を概ね達成できた(表16-3-3)、表21)。共同研究によって、地域映像の楽しみかた、認知症予防プログラムといった、地域学習の枠に留まらない幅広い成果の普及もできた(表21)。

反面、緊急事態宣言に伴う臨時休館のため、名寄会場の展示と関連講座は中止となり、当初計画した年度には、モデル地智恵文が位置する名寄市での成果の普及が

不可となる困難もあった。

(2) 考察と今後の課題

本事業から得られた知見をもとに、高齢者参画型の地域学習を他地域に拡げていく際の課題として指摘できることを、以下に記載する。

1) 高齢化と参加者の確保

まず、地域学習行事を行った2モデル地区では、参加者の高齢化が顕著に見られた。特に朝日町では、2006年の知恵の蔵発足から15年が経過した。この間、知恵の蔵は、朝日町の地域学習の担い手として町内外から認知され、資料室、朝日公民館、小・中学校、道博との共同事業などで、様々な活動成果を生み出してきた(例えば、青柳 2018a、2018b)。

しかし現在、高齢化によって在籍者数が減少し、老老介護や、少数の現役世代や健康な高齢者は仕事等で欠席が多く、行事に参加できる委員数が減っている。これを示す数値として、知恵の蔵の月例会への委員の平均出席者数(人)は、16.0(2015年度)から7.3(2020年度)へと大きく減少した。

朝日町では、委員のメンバーシップを重視する考えから、本地域学習行事をクローズ参加としたが、「口コミによる勧誘」といった従来の加入者補充方法のみでは、こうした参加者の減少を止めるのは困難な面がある。このことは、高齢者には、死や体調不良といったリスクがあり、彼らを主たる成員とする組織では、新規加入者を得る仕組みの設計が特に重要であることを示している。例えば、開催を広報するオープン参加と、クローズ参加の行事を併用するなどの方法で、組織の活動の理解者を増やし、行事参加者・新規加入者を増やしていく道筋が重要と思われる。

2) 参画者の協働関係形成

次に、智恵文で行事への参画者が拡大したり、自治体が高齢化し、コロナ禍であっても、多数の行事参加者が得られたりした背景に、公民館との協働関係があったことである。

高齢化の進行する農山村で新規に地域学習事業を開始することは、一般的に地元の負担感が大きいと思われる。しかし、本事例では、「地元学の発想による地域づくりの実現」という長期的な視野で、その意義が共有されることで、クラブ、青柳、公民館の三者に、主体性が生まれ当事業の役割・負担と利益とを分け合う「協働」の関係が形成された。こうした協働関係は、地域学習事業を、持続的に展開させる、成功要因の1つと考えられる。

地域学習の成果は、アンケート結果などを除くと、特に短期的には実感しづらいものである。しかし、本事業では、各回行事の書き起こし資料作成、研究会HPでの情報発信といった、地域知のアーカイブ化を意識的に進め、新聞報道による対外評価の獲得と参加者の増加など、目に見える形で成果を実感できる機会が生まれた。これらは関係者が行事に参画する動機、やりがいにつながったと思われる。

公民館との関係強化は、その後の小学校への出前授業、市関係者の講座参加、地方紙の継続的な報道など、さまざまな波及効果につながった。

3) 高齢者医療・福祉関係者との連携とプログラムの質的向上

本研究では、社会教育に関係するモデル地の組織機関と青柳が地域学習プログラムを企画し、青柳が評価可能な内容に限って効果を把握した。

今回、朝日町では、「心の健康づくり」の達成は比較的小数に留まった（表6）が、回想法のリーダー（進行役）には、グループワークやカウンセリングなどの高度な役割発揮が求められ、高齢者の健康の評価にも、専門職の協力が不可欠である。今後、高齢者参画型のプログラムを社会の仕組みとして、広域に拡げて行くには、博物館ら社会教育サイドと高齢者医療・福祉サイドが連携する体制をつくり、例えば、保健師、医師、介護職らに、PDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルに積極的に関わってもらうことが重要である。このことは、本研究の課題でもある、より多角的なプログラムの評価、目標への到達度合いに対する要因の分析、プログラムの改善にもつながる。

4) 児童・生徒数の減少と高齢者プログラム

今回、朝日町、智恵文双方で異世代の交流学习が実施されたが、参加した同地区内の全児童・生徒の数は一学年2～7人と僅少であった。少子高齢化の前線部にある道内農山村では、このように、従来、博物館が主要なターゲットとしてきた学校の児童・生徒の減少が顕著である。以前は別個に行ってきた講座を、複数学年合同で行うなど、学校への教育機会の減少も見られ、今後、博物館活動を行う対象や手法の再考が必要となっている。

博物館の役割発揮、地域社会での生き残りには、高齢者数が今後も増大していくことを受け、本事例で見られたような、高齢者対象のプログラムや、高齢者の参画を積極的に取り入れた、異世代交流を内容とするプログラムがより重要となってくると考えられる。こうした観点からも高齢者プログラムの開発と普及は意義がある。

さらに、そうしたプログラム実施の際には、近年の学

習指導要領改訂、総合学習の時間数削減⁽⁶⁾への対応も求められる。具体的には、今回の智恵文小学校への出前授業「今と昔の米づくり」「天塩川と智恵文」の例のように、講師と学校が打ち合わせを行うことが重要である。講師は、設定した学習テーマ、自分の専門分野を基軸にしつつも、社会や理科の単元での学習要素を盛り込むなど、学校が指導要領との合致を勘案して、教科として配置できるよう、授業内容を工夫する必要もあるだろう。

少子高齢化が急速に進展する現在、参画者が地域学習事業に役割発揮しながら継続的に利益を得られる、一層の関係強化が求められている。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、朝日郷土資料室、知恵の蔵運営委員会、初午会、名寄市智恵文公民館、智恵文中央老人クラブ、士別市立博物館、名寄市北国博物館、智恵文小学校、道北なよろ農業協同組合智恵文支所、美深町文化会館COM100、美瑛町郷土学館、道北地区博物館等連絡協議会の皆様、早坂有美氏、鈴木乙葉氏に大変お世話になりました。本研究は、JSPS科研費18K01108の助成を受けたものです。深くお礼申し上げます。

注

- (1) 地域学習プログラムの開発と実践（青柳）、地域資源に関連する映像アーカイブの構築（山下）、認知症予防プログラムの開発と実践（黄）として研究分担した。
- (2) 環境への関心や感受性を獲得するという「関心」、環境についての経験や理解を獲得する「知識」、環境への価値観、保全への参加意欲を獲得するという「態度」、環境問題を解決する技能を獲得する「技能」、環境問題の解決に関与・参加する「参加」を指す。トビリシ勧告では、段階的にこの目標が達成するのが良いとしている（市川 1995を参考に整理）。
- (3) ヒツの先端部が鋭利につくられた、トビの一種。行事参加者である、馬追い経験者への聞き取りでは、ヒツキリンは本文に後述する後藤鉄工場（士別市朝日町）が開発したとされる。朝日町史には、（後藤鉄工場の後藤伊之吉が）1935年頃、改良キリントビを造り出した旨の記述がある（朝日町 1981）。同工場の1982年頃の製品カタログには、「室刃付鷹」の記載があり、ヒツキリンは、改良キリントビにさらに改良が加えられたものと考えられる。
- (4) ヒツに三角形を2つ合わせたツメを溶接したトビ。既述の後藤鉄工場1982年頃の製品カタログには「爪付鷹」の記載がある。
- (5) 2020年夏、東京を中心に感染拡大が起きたとき（本州の第2波）、北海道では目立った感染拡大は起こらず、感染者数は比較的少ない状況が続いた（當瀬 2021）。
- (6) 2002年4月に開始した「総合的な学習の時間」は、2012年4月施行の学習指導要領で時間数が削減（小学校35%減、中学校10～44%減）されて、2020年4月施行の新学

習指導要領でも同じ時間数が引き継がれている（プラスエム；文部科学省）。この背景として教員の準備の負担が大きいこと、子どもの学力低下等が指摘される（プラスエム；矢野 2015）。

他方で、新学習指導要領では、「伝統や文化に関する教育の充実」（例 日本の言語文化：小中；国語、文化財・年中行事：小；社会、和食や和服：小；家庭、中；技術・家庭等）、「防災・安全教育などの充実」（自然災害：中小；理科）（文部科学省）が記載されるなど、本稿で取り上げたような地域学習プログラムが、各教科で実践できる可能性が示されている。

引用文献

- 青柳かつら 2014. 地域再生をめざした博物館を核とする地域資源ナレッジマネジメントに関する研究:住民参加による地域資源マップ製作. 北海道開拓記念館研究紀要 42: 1-22.
- 青柳かつら 2015a. 住民協働による森林利用技術の映像記録と活用. 北方地域の人と環境の関係史研究報告. pp. 173-176. 北海道開拓記念館.
- 青柳かつら・朝日郷土資料室・知恵の蔵運営委員会 2015b. JSPS科研費24700938報告書: 士別市朝日町 知恵の蔵 探してみよう! 地域のお宝 活動プログラム集. 北海道開拓記念館.
- 青柳かつら 2016. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発: 2015年北海道と2003年全国の博物館園対象高齢者プログラムアンケート調査結果の比較から. 北海道博物館研究紀要 1: 87-102.
- 青柳かつら 2017. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発II: 独居後期高齢者向け回想法サロンの効果と課題. 北海道博物館研究紀要 2: 25-38.
- 青柳かつら 2018a. JSPS科研費15K01153報告書1. 博物館を拠点とした高齢者と協働する地域学習プログラム集. 北海道博物館.
<http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/post/news/detail9281/> (2021年12月17日アクセス)
- 青柳かつら 2018b. JSPS科研費15K01153報告書2. 士別市朝日町の歴史と文化: 回想法サロンと異世代交流の記録. 北海道博物館.
- 青柳かつら 2019. 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発: 東旭川における高齢者参画型地域資源マップの効果と課題. 北海道博物館研究紀要. 4: 73-86.
- 青柳かつら 2020. 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発: 北海道内老人デイサービスセンターにおけるレクリエーションと博物館利用に関するアンケートの解析から. 北海道博物館研究紀要. 5: 203-222.
- 朝日町 1981. 朝日町史.
- 北海道社会福祉協議会(編) 2009. 過疎地域における高齢者の生活機能と地域再生の可能性に関する研究.
- 市川智史 1995. 国際環境教育計画 (IEEP) の第1期における環境教育の目的論に関する一考察. 科学教育研究 19-3: 197-204.
- 来島修志 2007. 地域回想法とは. pp. 47-62. NPOシルバー総合研究所(編) 地域回想法ハンドブック.
- 北名古屋市(編) 2013. 高齢者の居場所づくりと役割づくり. 北名古屋市.
- 文部科学省. 授業時数(平成10年改訂→平成20年改訂)の比較. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1304385.htm (2021年12月17日アクセス)
- 文部科学省. 幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント. https://www.mext.go.jp/content/1421692_1.pdf (2021年12月17日アクセス)
- プラスエム 「総合的な学習の時間」の変遷. <https://www.plus-m.co.jp/learning-time/> (2021年12月17日アクセス)
- 當瀬規嗣 朝日新聞. 2021年10月13日朝刊.
- 矢野 武 2015. 総合的な学習の時間. 阿部進(監修) みんなでつくる「総合的な学習の時間」. 財務省印刷局.
- 吉本哲郎 2008. 地元学をはじめよう. 岩波書店.

Development of Innovative Regional Education Contents for the Wellbeing of an Aging Society 3: Regional Studies and Traveling Exhibition Projects Featuring Indigenous Knowledge of the Elderly

AOYAGI Katsura, YAMASHITA Shunsuke and HWANG Kyung Sung

To identify results and issues of regional study and traveling exhibition projects featuring indigenous knowledge of the elderly, this study performs: (1) participant observation, (2) questionnaires for participants of regional study events, (3) questionnaires for staff of traveling exhibition projects, and (4) questionnaires for participants of lectures at traveling exhibition projects.

Regarding regional studies, from (1), this study finds that results include enrichment of information about objects in collections of the venue museum, and creation of visiting lecture programs at the elementary school. From (2), it finds positive effects upon elderly mental health, historical / cultural archives, and intergenerational culture transmission. Regarding traveling exhibition projects, from (3),

it finds that opportunities have been created for exhibit visitors to learn about regional resources and rediscover local connections, and that the traveling exhibit staff have gained expertise regarding programs for the elderly. From (4), exhibit visitors have reported improved mental health and enhanced appreciation for local video.

Issues for widespread development of participation-based regional study programs for the elderly include: efforts to attract new study participants, cooperative relationships to ensure sustainability of projects, liaison with elderly healthcare and welfare organizations, and programs suited to education guidelines of schools participating in interactive studies.

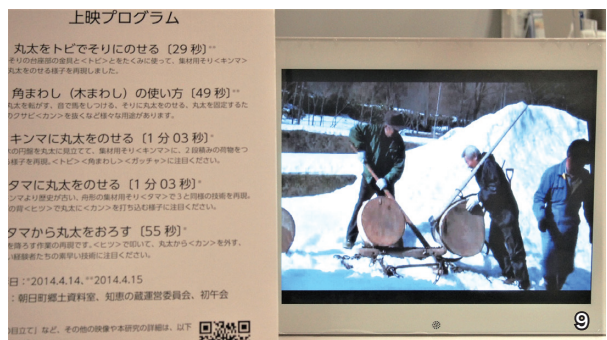
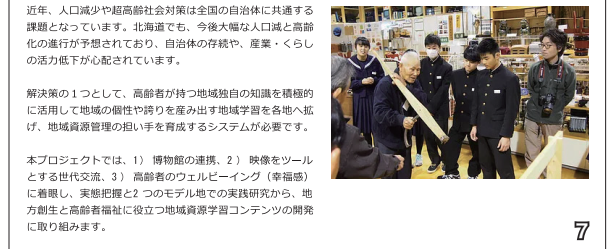


写真1 地域学習行事の様子（朝日郷土資料室にて）

写真2 サロンでの対話（人物が触れているのがヒツキリン）

写真3 ツメ付きトビの使い方を実演（写真3-1はツメ付きトビのツメ部分、人物が指で示しているのがツメ）





- 写真4 ペアで協力して羊毛から毛糸をつくる様子
 写真5 小学校出前授業「昔と今の米づくり」
 写真6 感染症対策をした行事（紙石盤で字を書く体験）
 写真7 みゆげけんホームページ
 写真8 クローズアップ展示「馬追いの道具」
 写真9 経験者による集材技術の再現映像
 写真10 高齢者の語りを大きな字幕にした巡回展映像
 写真11 巡回展士別会場講座（士別市立博物館撮影）





写真12 巡回展士別会場
(士別市立博物館撮影)

写真13 巡回展美深会場
(美深町教育委員会撮影)

写真14 巡回展美瑛会場
(美瑛町郷土学館撮影)

